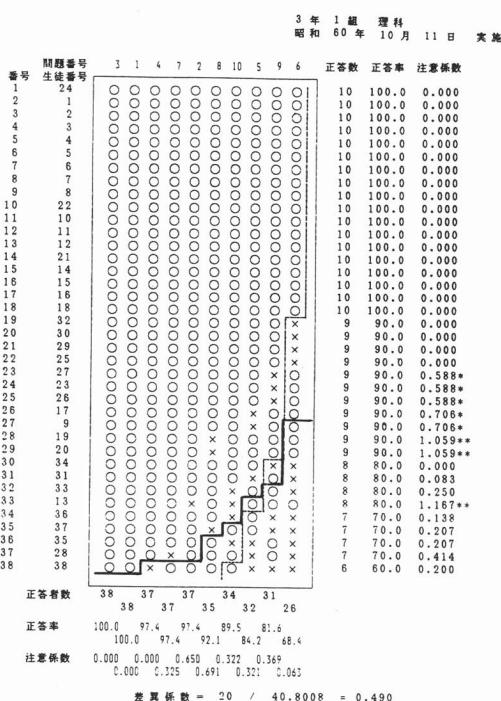
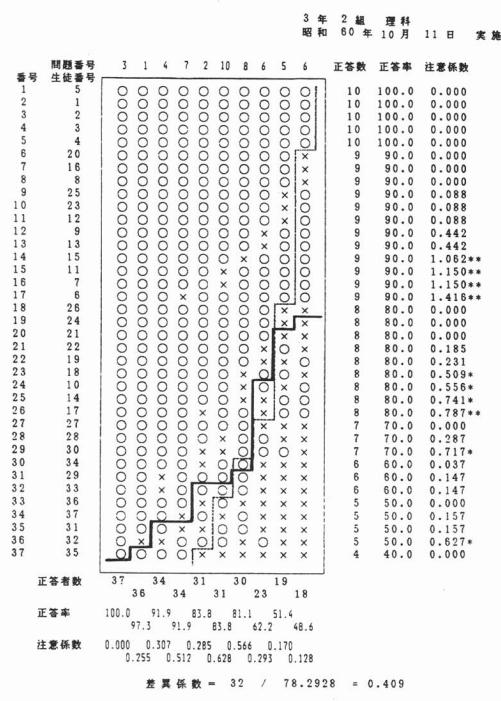


(4) 事後テスト S-P 表 (実験群)



事後テスト S-P 表 (統制群)



6. まとめ

(1) 考察

事後テストにおける等分散の検定（F検定）と平均値の差の検定（t検定）結果から判断して、統制群より実験群の方がすぐれた結果が得られている。S-P曲線の分析からも、統制群の平均正答率が90.8%に対し、実験群では90.8%である。これらのことから、学習効果が上がり、一人一人に学習が定着していると考えられる。注意係数から考えると、0.5以上のものがあるが正答率が高いので、大きな問題点はないと思われる。しかし、問題の数が少ないためか、差異係数が0.5以下ではあるが、単元テストとしては少し高めなので、今後の検討が必要である。

実験群の13番、19番、20番の生徒、統制群の15番、11番、7番、6番の生徒等についても学習が不安定でミスが多いと思われる所以、今後、個別に指導を続けていく必要がある。

(2) まとめ

分解者の指導において、ビーカーのみを用いた従来の方法に比較して、フィルムケースを用いた指導法が、効果的であり、しかも個別化がはかるかどうか二群法をもとに分析検討してきた。これらの結果をふまえると、まだ若干の問題点があるにしても、効果的な指導法であることがわかる。

ここで述べたS-P曲線やF検定は、t検定は、検証するための一方法をモデル的に示したものである。不完全な部分があると思うが、実際の授業でさらに実践研究を深めていただきたい。